

竹村憲郎先生のご退職にあたって

大 曾 根 匡
経営学部教授

竹村憲郎先生のご業績については瓶子長幸学部長から本論集の冒頭で紹介があるかと思いますが、私は竹村先生のお人柄について思いのまま回顧したいと思います。私が竹村先生と個人的に親しくお付き合いさせていただききっかけは、平成元年の教職員バスの中でした。竹村先生のほうから私に声をかけられてきました。「来年学会を開催するので手伝ってもらえないか。SM学会というんだよ。セキュリティ・マネジメント学会の略称なんだが、よろしく頼むよ。」という感じだったと思います。このころ私は入職したての新人教員でしたので、お断りするわけにもいかず、お引き受けいたしました。ところが、これが大変勉強になりました。竹村先生が大会実行委員長として全国大会を開催されたのですが、その運営手腕が実に素晴らしかったからです。教室や備品の準備、実行委員会の運営、基調講演や特別講演の立案、実行委員の役割決め、学生スタッフの運用、印刷物の手配、広告掲載の依頼、収支報告書の作成など、極めて手際良くテキパキ計画を立てられ実行される様子を間近で拝見させていただき、イベント開催にずいぶん慣れておられる先生だなという印象を強く抱きました。当然、全国大会は大成功でした。参加人数も多く、大きな黒字を生み出し、学会に貢献しました。さらに、竹村先生は、実行委員会の反省会で実行委員や学生スタッフひとりひとりに声をかけられて、労をねぎらっておられました。このとき、竹村先生に頼もしさのほかに心遣いも感じました。この頼もしさと優しさが、竹村先生の魅力のひとつではないでしょうか。

さて、竹村先生の人脈の広さにも驚かされます。経営学部30周年記念行事、経営情報学会や日本セキュリティ・マネジメント学会などの全国大会などで、竹村先生が実行委員長としてイベントを開催されると、イベントの目玉となる有名人をどこからともなく呼んでこられます。私の記憶では、NECの関本忠弘社長、資生堂の福原義春社長、日本ユニシスの島田精一社長など、著名な方々を特別講演者としてお招きしておられます。また、M&ITというプライベートな研究会を平成5年頃から竹村先生が立ちあげられ、10年以上も主宰されておりましたが、ここでも、丸紅、三菱商事、三菱銀行、第一生命、安田火災、味の素、ポーラ化粧品などの大企業の情報システム部長を正会員として入会させておりました。この研究会は、経営に情報技術をどう役立たせるかを勉強する研究会で、水曜日の夕方に月1回のペースで開催し、私も事務局としてお手伝いさせていただきました。そして、企業の抱えている情報システムの問題点や新しい情報システムについて勉強させていただきました。その機会を通して、私も有益な人脈を得ることができました。その中のメンバーのひとりである佐藤正敏氏は、現在、損保ジャパンの社長に就任され、辣腕をふるっておられます。

竹村先生は、文章にこだわりをもたれている方だと思つづく思います。いろいろな場面で、竹村先生のお書きになられた礼状やら招待状の類いを数多く拝見させていただく機会がありましたが、その文面は大変よく練られており、その内容には気遣いが感じられます。また、教授会に議題として規程等の改正の文案が出てくると、すぐに誤りや文章の表現のおかしなところを見つけられ、それを指摘されるのも竹村先生でした。10数年前までは、毎年のように学費の改定問題が教授会の議題として出されてきました。教授会ではそれを毎回否決しましたが、理事会の決定で授業料の3%増が実施されるという事態が、毎年繰り返されていました。そして、そのたびに教授会では理事長に対し抗議文のようなものを出すのが恒例になっていました。このようなとき、抗議文の文案を作成する教員として推薦

されることが多かったのが竹村先生だったと記憶しております。先生のお書きになる文章に対し、教授会の多くのメンバーが信頼していたからです。そこで私も、ときとして自分の書いた文章を竹村先生にお願いして添削していただいたりしておりますが、困ったことに、「敬語の使い方が変だよ」などと最近でもご指摘をいただいております。この拙文のなかにも敬語遣いのおかしなところがあると思いますが、お許しください。竹村先生にはお見せしていないものですから。

竹村先生は、筋を通すことを旨とし、原則を大事にされる方です。いわゆる、「ブレない」方です。教授会での発言においては、物事をはっきり主張されるので、竹村先生の発言がきっかけとなり、大論争が起こることもしばしばありました。私は、そういう論争を聞くのが好きなものですから、不謹慎ですが、竹村先生の教授会での発言は楽しみにしておりました。竹村先生も江戸っ子ですので、喧嘩と花火はお好きなようです。そういう意味で、竹村先生は最近の教授会にはやや不満を持たれているようです。

一方、「ブレる」というと最近の首相の発言を思い起こしますが、鳩山由紀夫首相誕生時の昨年9月ごろ、竹村先生は、宇佐美嘉弘先生とともに、テレビや週刊誌などのマスコミによく登場されておりました。鳩山首相が専修大学で教鞭をとられていた時代の経営学部の同僚教員という立場で、鳩山首相の専修大学時代の様子についてコメントされておりました。特に印象的だったのは、テレビ朝日の「スーパーモーニング」という番組の中で、鳩山首相の書かれた情報科学研究所の論文を研究室の書棚から探し出すという演技を、テレビカメラの回る前で見事に自然に演じられたところでした。TPOをわきまえておられるので、こういう場面では上手に演技をされます。こういうお茶目な面を持っておられるのも竹村先生の魅力ではないでしょうか。

竹村先生は40年以上も経営学部に所属されてきましたが、その間に経営学部にさまざまな制度を作られました。そのひとつに学部長補佐制度があ

ります。当事者である当時の坂本實学部長はこの制度に難色を示されておりましたが、それにもかかわらず、竹村先生は教授会に提案され、この制度を通してしまわれました。面白いことに、竹村先生は最初の学部長補佐として学部長から指名され、就任されました。そして、学部長のサポートを献身的にされ、経営学部の学部運営の新しいスタイルを確立されました。その後の学部長は、この学部長補佐制度により、ずいぶん負担が軽減されたのではないのでしょうか。さらに、竹村先生はいろいろなポイントシステムを導入されました。長期在外研究員や短期在外研究員、国内研究員になるための順番を自動的に決めるSLポイント（Sabbatical Leave Point：研究員派遣ポイント）システム、研究室の順番を決める研究室ポイントシステムなどです。これらのポイントシステムにより、声の大きな教員の順番が理不尽に早くなるようなことが生じなくなりました。9号館が新築されたときにも、経営学部の研究室の確保には腐心され、良い場所の研究室を数多く獲得されました。

竹村先生は、新しいことを進んで取り入れるという気概をもっておられます。たとえば、いわゆる「学生による授業評価」は、竹村先生が学部長に就任されてすぐに手掛けられ、1995年に実施されました。今から15年も前のことです。この「学生による授業評価」は、他大学でも実施していた大学はほんの数えるほどでした。そのような時期に、経営学部だけが経営学部独力で実施し、先鞭をつけることになりました。竹村先生は、中山雅博先生や嶺井正也先生を中心とした実施委員会を立ち上げられ、私もそのメンバーの一員として指名されました。授業評価の実施に関してはお手本になるようなものが少なかったので、実施委員会では、調査項目の選択、調査票の設計、アンケートの実施方法、アンケートの集計方法などを手探りの状態で始めました。それ以上に、教員のほうに学生から授業を評価されるという経験がないものですから、教員の意識改革をして、教員にこの「学生による授業評価」に参加してもらうことが最大の課題でした。その

難問に竹村先生はリーダーシップを発揮され、教授会の同意を得ることに成功されました。経営学部の多くの教員は、「学生による授業評価」を好意的に受け止めていたようです。実施委員会では、12月に学生に対しアンケートをとり、2月にデータ集計を行い、そして、9月に報告書を発行することができました。このようなスピードで達成できたのは、竹村先生の知識と経験とリーダーシップによるところが大きいと思います。実は、竹村先生はアンケート調査に慣れておられたのです。しかも、コンピュータによるデータ処理に関して熟知しておられ、さらに、経費についても、得意とされる大学当局との交渉術により工面されました。このことが、短期間に実施できた要因であると思います。具体的には、齋藤雄志先生と伊東洋三先生が大型計算機のSASを利用して統計処理を行い、私が集計データに基づいてExcelを用いて表やグラフにまとめるという手順でデータ処理を行いました。このように、ヒト・モノ・カネを上手に使えば、内部の教員だけでコンピュータを使って短期間に達成できるという発想を竹村先生はもたれておられたのです。まさに経営者の発想ではないでしょうか。

専修大学に大学入試センター試験を最初に導入されたのも竹村先生でした。その当時、C方式（数学重視）やD方式（英語重視）を経営学部の独自入試として実施していましたが、これらの方式の受験生が減少しつつありました。この状況をみて、この機会にセンター試験方式を取り入れたほうがよいと考えられたようです。今から10年前の2000年1月のことですが、そのおかげで経営学部の教員だけがセンター試験の試験監督に駆り出され、私も2日間連続で試験監督を行った思い出があります。しかし、そのおかげでセンター入試は専修大学の入学試験の大きな柱のひとつに育ちました。入学試験でいえば、「情報」という科目を一般入試の選択科目に取り入れようと発案されたのも竹村先生でした。いや、私かもしれません。いずれにせよ、竹村先生をチーフとし、魚田勝臣先生、渥美幸雄先生、渡

辺展男先生、植竹朋文先生と私でチームを作り、高校の「情報」の教科書を勉強し、問題作成を行いました。これも他大学でも前例のないことであったので、手探り状態で始めました。2006年度入試から始め、昨年の2009年度入試を最後に一旦休止することにしましたが、入学試験の問題としてバランスの良い出題形式を確立したと自負しております。この詳細については、本論集に掲載されている植竹先生筆頭の論文に譲ります。

また、高等学校の「情報教職」のカリキュラムも竹村先生が中心となって始められました。これも10年前のことですが、経営学部の情報管理学科がネットワーク情報学部として独立した後に、経営学部の情報関係の目玉となるカリキュラムを作成しようということで、新たに構築しました。竹村先生と魚田先生と私の3名で「情報教職」のカリキュラムの設計をし、全ての科目のシラバスを作成し、竹村先生が文部科学省に出向かれて申請され、認可されました。これもかなりのスピードで構築しました。この「情報教職」により、経営学部から多くの学生が高等学校の情報の教員として巣立っています。

竹村先生はもともと「会計系列」の教員とされている方も多いかと思いますが、竹村先生はミネソタ大学大学院留学中にコンピュータについて勉強されており、その関係で「データプロセッシング」担当ということで採用されたようです。そういう意味では、「情報系」の教員として入職されたわけです。後に専門である会計学関係の講義を担当されるようになり、「会計系列」の教員になられたようです。その後、情報化社会の進展とともに、コンピュータや情報化のほうに興味を持たれて、担当講義のほうも「経営情報論」のほうへシフトされました。そして、10年前にネットワーク情報学部が誕生したときに、経営学部の情報や数学関連の専門科目の教員が魚田先生と宇佐美先生と私の3名だけと弱体化したため、竹村先生に「会計系列」から「情報管理系列」へ移籍していただいた経緯があります。

竹村先生は英語がご堪能であることでも有名です。外国人客の多いバー

にご一緒させていただいたとき、すぐにそばの女性に英語で話しかけられ、談笑されたのには驚かされました。その英語力を活かして、専修大学の国際交流にも多大な貢献をされております。専修大学は1985年にネブラスカ大学とサクケハナ大学の2大学と初めて国際交流協定を締結しましたが、これを企画し実現させたのが竹村先生です。専修大学の国際化の礎を築かれたといえましょう。

最後に、少し柔らかいほうの話も紹介したいと思います。竹村先生は美食家です。雑誌や週刊誌などに掲載された話題のお店を切り抜いてファイリングされており、そういうお店を食べ歩くことを秘かな楽しみとされております。20年前ごろ、私は、お店の名前と電話番号などがびっしり書かれてある竹村先生の手帳を拝見したことがあります。現在はケータイにお店情報がたくさん入力されていることでしょうか。私がある目的でレストランに行きたいなと思ったとき、竹村先生に相談すると、すぐに適当なお店を紹介していただき助かっております。コストパフォーマンスを大事にされる先生なので、紹介されたお店で悪かったことは一度もありません。お酒に関しても、竹村先生は、ビール、日本酒、ウイスキー、焼酎と何でもいける口ですが、最近ではワインに特に思い入れがあるようです。「神の雫」というまんが本でワインの勉強をされたと伺っておりますが、その知識の豊富さにはついていけません。一方、カラオケは決してなさりません。しかし、音楽自体はお好きなようで、シャンソンなどをときどき聞きにいかれるという隠れた趣味も持っておられます。運動のほうは、60歳からゴルフを始められたようですが、こちらはゴルフ用具で勝負されているようです。良い道具が良いスコアの秘訣ということらしいです。ゴルフ&麻雀大会というのを先生のお仲間と定期的にされていると伺っております。このように、遊ぶことも大好きな先生です。

ところで、20年前に竹村先生が実行委員長として開催されたセキュリティ・マネジメント学会ですが、奇遇なことに、竹村先生がご退職される今

年、私が大会実行委員長として全国大会を開催することになりました。そこで、私もある新任の先生に、「来年学会を開催するので手伝ってもらえないか。SM学会というんだよ。セキュリティ・マネジメント学会の略称なんだが、よろしく頼むよ。」という感じでお願いしてしまいました。

先生とは20年以上にも渡って公私ともどもお世話になり、お付き合いいただき感謝しております。長いお付き合いなので思い出話も尽きませんが、紙面と締切りの関係上、このあたりで筆をおきたいと思います。40年もの長い間、経営学部のためにご尽力いただきありがとうございます。先生は経営学部の歴史そのものです。それでは竹村先生、いつまでもお元気で。

(2010年1月11日)